礼拝説教（2026 年 10 月 11 日）

説教者：中村信哉

# 賢い人の生き方

マタイの福音書 7 章 24-29 節

**はじめに**

今日の聖書箇所で、イエス様は一つのたとえ話を話されました。それは、**「岩の上に自分の家を建てた賢い人」**と**「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」**のたとえ話です。

イエス様は、イエス様の言葉を聞いて、それを行う人はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができると言われます。そういう人は、たとえ嵐がやって来ても、土台がしっかりしているので、決して倒れません。逆に、イエス様の言葉を聞いても、ただ聞き流してしまう人はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人にたとえることができると言われます。そういう人は、嵐がやってくると、土台がしっかりしていないので、ひどい倒れ方で倒れてしまうと言われるのです。

**1. 賢い人と愚かな人の共通点**

この両者は、非常に対照的ですが、共通している点もあります。それは、両者ともイエス様のことばを「聞いている」ということです。賢い人は、イエス様のことばを聞いているが、愚かな人は、イエス様のことばを聞いていないということではないのです。賢い人も、愚かな人も、イエス様のことばを「聞いている」のです。問題は、聞いた後です。「聞いて、それを行うか」、それとも「聞いて、それを行わないか」です。聞いたけれども、自分とは関係のないこととして聞き流してしまうか、それとも聞いて、その通りに生きてみようと思うかどうかです。ここが分かれ道なのです。イエス様のことばを聞くこと、聖書のことばを聞くこと、それは誰にでもできることです。大切なのは、聞いた後です。聞き流してしまうか、それに生きるかで、人生は大きく変わってしまうのです。

もう一つの両者の共通点は、両者とも「雨」や「洪水」や「風」を経験するということです。「雨」や「洪水」や「風」というのは、今で言うと「台風」のことでしょう。大雨や強風が吹き荒れると、川が増水して洪水となります。それが濁流となって、家にまで浸水して、時には家を押し流してしまうことさえあります。ここでの「雨」や「洪水」や「風」は、私たちを倒れさせる人生の試練と言ってもよいでしょう。これは、誰もが経験するものなのです。イエス様のことばを聞いて、それを行う人は、「雨」や「洪水」や「風」などの人生の試練を経験しないということではないのです。イエス様のことばを聞いて、それを行えば、苦しいこと、悲しいこと、辛いことは起こらない、そういう御利益があるというのではないのです。イエス様のことばを聞いて、それを行なっても、人生の試練は経験するのです。自分や家族が病気になることもあるでしょう。経済的に苦しくなることもあるでしょう。自然災害や事故に巻き込まれることもあるでしょう。思い通りに

ならないことや予想外のことがいくらでも起こるのです。人生の試練は、イエス様のことばを聞いて、それを行う人も、それを行わない人も、両者が経験するものなのです。問題は、その試練の時に耐える力があるか、それとも倒れてしまうか、なのです。イエス様のことばを聞いて、それを行う人は、試練に耐え抜くことができるのです。しかしイエス様のことばをただ聞き流してきただけの人は、試練に耐え抜くことができずに、ひどく倒れてしまうと言うのです。

イエス様は、このたとえ話の直前の 21-23 節で、「天の御国に入る」「その日」「そのとき」という言葉を使われます。これは、私たちの肉体の死の時であり、またこの世の終わりの最後の審判の時と言えます。新約聖書のヘブル９：27 には、こういう言葉があります。**「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」**。人生の試練には、様々な種類があるでしょう。多くの試練を経験する人も、少なく試練を経験する人もいるでしょう。しかしすべての人間に共通していることは、必ず「死ぬ」ということです。この「死」という試練は、例外なく誰もが経験するものです。しかしどのように死ぬかは、誰も分かりません。病気で死ぬのか、事故で死ぬのか、寿命を全うするのか、それは私たちには分かりません。しかし、イエス様のことばを聞いて、それを行う人は、この「死」という試練をも耐え抜き、乗り越えることができるのです。

また聖書によれば、私たちは死んだらすべてが終わるわけではありません。死後に、最後の審判者であるイエス様から、さばきを受けるのです。そして私たちの人生で語ってきた「言葉」、行なってきた「行動」、抱いてきた「思い」のすべてがさばかれるのです。しかし、イエス様のことばを聞いて、それを行なってきた人は、その最後の審判にも耐え抜き、すべての罪が赦され、救われることができるのです。

## 2. <u>賢い人と愚かな人の相違点</u>

さて、これまで賢い人と愚かな人の共通点を見てきましたが、今度は相違点、違っている点を見てみましょう。賢い人は、岩の上に自分の家を建てましたが、愚かな人は、砂の上に自分の家を建てました。ここが決定的な違いです。一見すると、愚かな人は、海辺の砂浜の上に家を建てて、賢い人は山の上の堅固な岩の上に家を建てたように見えますが、どうやら両者は同じ場所に家を建てたようです。これと同じたとえ話が書かれているルカ６章を見ると、賢い人は、**「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた」(ルカ 6：48)**とあります。逆に、愚かな人は、**「土台なしに地面に家を建てた」**とあります。つまり、おそらく両者は同じ場所に家を建てたのですけれども、賢い人は、「岩の土台」が出てくるまで、「地面を深く掘り下げて」家を建てたのですけれども、愚かな人は、「地面を深く掘り下げずに」、そのまま地面の上に家を建てたのです。それゆえ愚かな人には、土台がなかったのです。問題は、「地面を深く掘り下げた」かどうか、なのです。砂を取り除いて、岩を見出したかどうかなのです。

イエス様のことばを聞いて、それを行うというは、イエス様のことばを実践したかどう

かということよりも、イエス様のことばを、「深く掘り下げた」かどうかなのだと思います。イエス様は、このたとえ話の直前の 21-23 節で、「主よ、主よ」と言うものがみな天の御国に入るのではないとか、イエス様の名によって預言し、悪霊を追い出し、多くの奇跡を行った人がみな最後の審判の時に救われるわけではないと言われました。彼らは、祈り、賛美し、宣教に熱心でした。ですから必ずしも実践が、救いの保証にはならないのです。大切なのは、イエス様のことばを「深く掘り下げ」、イエス様としっかりと結びついたかどうかということではないでしょうか。

使徒パウロは、こう言いました。**「私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました。・・・その土台とはイエス・キリストです」**（**Ⅰコリント 3:10-11**）。私たちは、イエス様のことばを聞いて、それを「深く掘り下げて」、イエス様という土台を見出さなければなりません。イエス様のことばを聞いて、ただ表面的に聞いて、それを実践するというのでは、私たちは人生の試練に耐え抜くことができないのです。そうではなくて、イエス様のことばを聞いて、それを「深く掘り下げて」、余計な砂や砂利を取り除かなければなりません。イエス様と私たちの間を隔てているものを、一生懸命に取り除かなければなりません。そして私たち一人ひとりが、しっかりとイエス様と直接に結び付かなければなりません。そういう生き方でなければ、私たちは人生の試練に耐え抜くことはできないのです。イエス様のことばを聞いても、ただ聞き流しているとか、表面的に聞いて、それを実践するというのでは、人生の試練に簡単に押し流されてしまうのです。

### 3. <u>権威ある者として教えられたイエス</u>

さて、28 節を見ると、イエス様のこれらのことばを聞いた群衆は、**「その教えに驚いた」**とあります。なぜ驚いたかというと、**「律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたから」**です。

イエス様は、この「山上の説教」の中で、旧約聖書の律法を用いて、律法ではこう**「言われているのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います」**と言われました。つまりイエス様は、ご自身のことばを、旧約聖書と同等、またそれ以上の「ことば」として語ってこられたのです。そして今日の聖書箇所でも、「わたしのこれらのことば」を聞いて、それを行うかどうかで、賢い生き方と愚かな生き方が分かれてくる、人生の試練に耐え得るかどうかがかかってくると言われるのです。

律法学者たちの教えは、あくまでも旧約聖書を説き明かすものでした。ですから「神様はこう言われる」「律法にはこう書かれている」「預言者はこう言われる」という語り方でした。私たち牧師も、説教では、「神様はこう言われる」「イエス様はこう言われる」「聖書にはこう書いてある」という語り方しかできません。しかしイエス様は違います。イエス様は、「わたしはこう言う」「わたしのことばを聞け」と言われるのです。このような語り方は、律法学者や私たち牧師には、絶対にできないことです。神様と自分を同等にすることになるからです。しかしイエス様にはできるのです。それは、イエス様こそ「生ける

まことの神」であるからです。ご自身が、全知全能の唯一の神、主と呼ばれる「生けるまことの神」であるからこそ、「わたしはこう言う」「わたしのことばを聞け」と言うことができるのです。

群衆は、今まで「わたしはこう言う」「わたしのことばを聞け」というような権威ある説教を聞いたことがなかったのでしょう。だからこそ群衆は驚いたのです。イエス様の説教は、律法学者や私たち牧師とは全く次元の違う、この天地を造られた唯一のまことの全知全能の神様の「ことば」なのです。このことばを、「聞き流すのか」それとも「深く掘り下げるのか」が、今日のたとえ話を通して私たちに問われていることなのです。

**おわりに**

皆さんは、人生の土台を持っているでしょうか。人生の試練、死そのもの、死後の最後の審判に耐え抜く、確かな人生の土台を持っているでしょうか。

私たちにとって家を購入すること、特に新築の家を建てることは一大事です。できるだけ長く住めるように、一応、土台がしっかりしているかは気にするでしょう。家を建てる地域の地盤の状況を確認することもあるでしょう。しかし人生の土台はどうでしょうか。人生の土台をしっかり築いた上で、人生を生きているでしょうか。それとも土台なしに人生を生きているでしょうか。

土台は、ひとたび家が建ってしまえば、私たちの目には見えません。土台がしっかりしているかどうかは、地震や台風など、自然災害の時に初めて分かるのです。人生の土台も同じです。人生の土台も目には見えません。しかし、人生の試練、死そのもの、死後の最後の審判の時に初めて、土台がしっかりしているかどうかが重要な意味を持つのです。

イエス様は、賢い人は、自然災害に備えて、地面を深く掘り下げて、岩の上に土台を据えると言われます。賢い人の生き方は、あらゆる人生の試練に備えて、土台をしっかりと持つ生き方なのです。土台をしっかりと持つためには、地面を深く掘り下げるという手間と時間がかかります。その手間と時間を惜しむかどうかで、人生は大きく変わってくるのです。私たちの人生の土台は、生けるまことの神であるイエス様です。この天地を造られた全知全能の神であるイエス様です。私たちは、聖書のことばをただ聞き流すのでも、表面的に聞いてやみくもに実践するのでもなく、しっかりと「深く掘り下げて」いけば、必ずイエス様を見出すことができるのです。あらゆる試練に耐え抜く人生の土台を手に入れることができるのです。

使徒パウロは、イエス様のことばを「深く掘り下げて」、イエス様を人生の土台に据えた人です。彼はこう言っています。**「私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません」**（**Ⅱコリント 4:8-9**）。イエス様を人生の土台に据えて人は、決して倒れないのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの人生には、あらゆる嵐が訪れます。嵐なしに人生を終えることはできません。少なくとも、死そのものと最後の審判は、私たちが必ず経験する嵐です。イエス様は、その嵐に備えて、しっかりとした土台を据えるように教えられました。私たちは、平穏無事の時は、嵐など来ないかのように、また嵐が来てから考えればよいと呑気に過ごします。しかし嵐は思いがけない時にやって来ます。私たちは、嵐に備えて賢い生き方をすることができますように。嵐に耐え抜く土台をしっかり見出すことができますように。どうか地面を深く掘り下げる手間と時間を惜しむことがありませんように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。